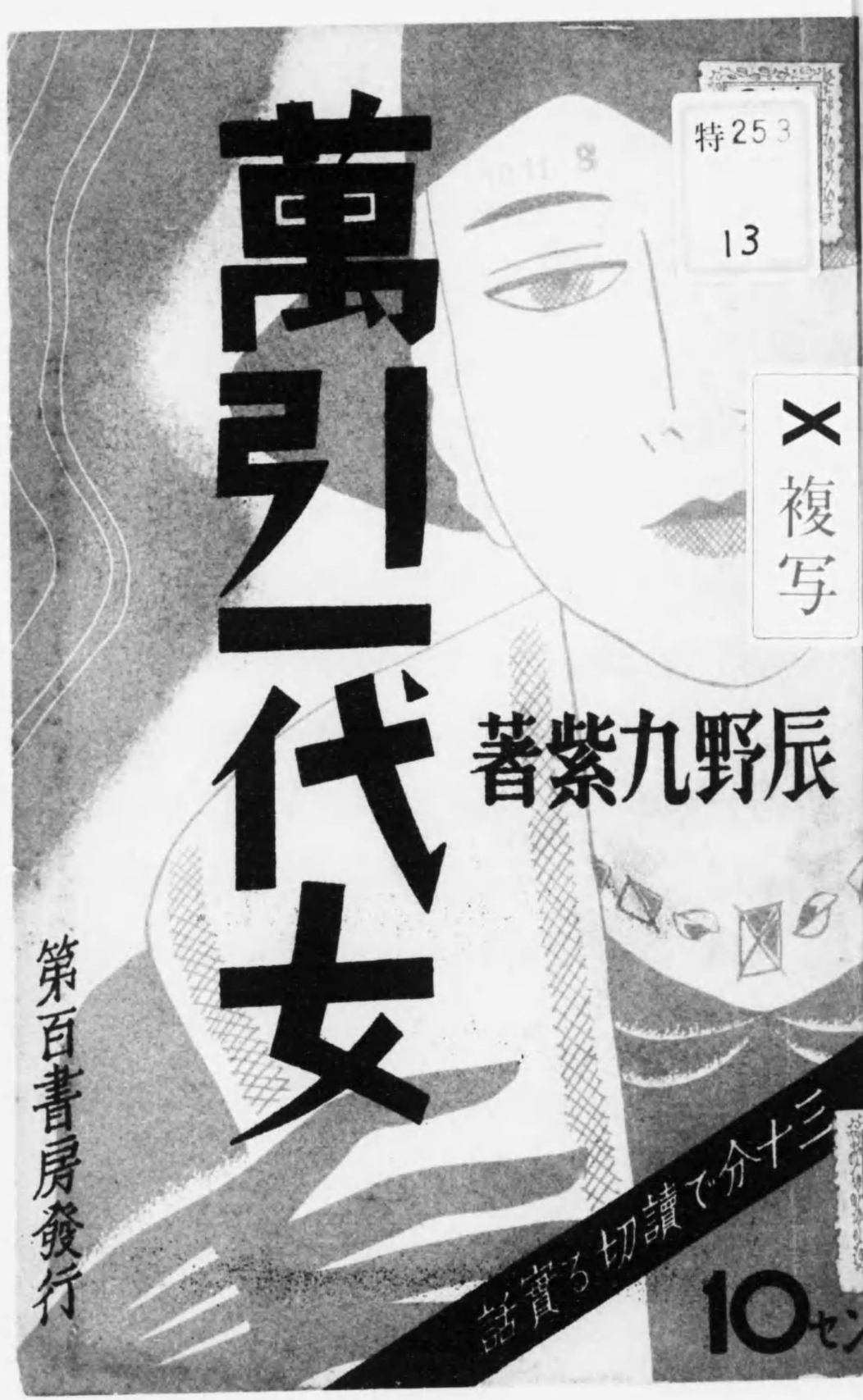

特253
13
×複写

始

特253
13

帝國圖書館藏

萬引一代女

長野九紫著

第百書房版

昭和十二年十一月廿六日
帝國圖書館

萬引一代女

目次

七十の花聟
退役憲兵中佐
野暮なやの字
町の長老會議
妖魔の婚禮
家内絶對安全
老のランデヴウ
奥の手常用
手當り次第
萬引狂奏曲

萬引一代女

七十の花聟

上野から東北本線を宇都宮への中ごろに、古河と書いてコガと讀ませる町がある。――遠く足利時代には古河公方が頑張つてゐたし徳川の天下には譜代大名土井大炊頭利勝以來利根川の渡船場を扼して江戸の安泰を圖る名君十六萬石……後には何か理由ありの、八萬石に減らされた城下町として、日光街道行き戻りの客で賑はひ、數年前までは長谷川伸の

股旅ものにありさうな構へのお女郎屋が、張見世と稱する古風な制度を守つてゐた珍らしさに――古河はよいとこ一度はおいでなんて、他所の小唄を無斷借用して、メリンスの袖で招かずとも、面白いから覗いてみろと、口々に算盤を彈いて關八州をめぐるお世辭の渡り鳥、地方廻りの外交員氏が定められた旅費の範圍内で、洋服の塵を拂つて浩然の氣とやらを養ふには、宿屋へ泊るよりも割安お恰好の土地として、へえゝ、これが茨城縣かいなと、初めての人には栃木埼玉兩縣に挾まれた人口一萬八千の田舍町を、冬來りなば狩獵の地、四季を通じて魚釣り好適の結構な場所柄が羨ましくも思はれやうが、米、株、生絲と三拍子揃つて、思惑相場を張り店の多い商家の旦那衆が、寄つてたかつて無理融通の利く田舍銀行を、二つまでもぶッ潰したのを自慢にすれば、相當に氣の荒い町ぢやと合點召さるであらう。

さればにや、政民兩黨の泥合戰を眞似たみたいな町政に、離合集散常ならぬ議員連中の勢力爭ひもソウトウなもんで、その飛沫を浴びてあちこちとこづき廻される町長の役は、幇間の修養を積んだ男にも勤まらぬとあれば、われから進んでなりたがる物好きな馬鹿もなく、折角の名譽職に穴があいては不體裁極まると、有志一同思案投首の末、

『わが愛する町のために、是非どうぞ……』

と白羽の矢を立てゝ、御出馬を懇請した先が永らく東京の大會社に重役を勤め上げて、老後の餘生を故郷に飾つて悠々自適、謠曲と碁に有閑の加藤庄之助翁であつた。

そこで、庄翁は　いや〳〵ながらも老軀を古河の町長に擔ぎ上げられたのである。

それも全會一致の形式で推擧したのだから、いかに泥試合に熱狂する町議諸君と雖も、當分は義理にも政爭の開戸休業を勵行せざるを得ない。

――昭和五年秋九月、その近來稀なる平和な町役場の老町長の卓上に、戸籍係の吏員が一通の書類を提出して、にや〳〵した。

『葉山さんの婚姻届です。』

『葉山？』

『はア、觀念寺の閣下……』

『ほゝう、葉山端吾か。』

『えゝ、安政五年生れといひますと七十三ですね。』

『左樣――俺より五つ六つ年上のはずだ。』

『達者なもんですなア……』

『どうせ茶呑み友達ぢやろ。』

『いゝえ、さうでもなささうです。』

『ふむ、相手は幾歳だ？』

『三十六――』

『ナニ、三十六……馬鹿に若いナ。間違つてやせんか。』

『大丈夫です。私の家内も實は明治二十八年生れなんで……』

『ははア、君は何年生れか。』

『矢張り同い歳です』

町長が――なアんだといふやうな顏をしたので、吏員はお安くない自分達夫婦同年の由來を訊かれない前に退却したが、庄翁の老眼鏡の底には、七十三對三十六のコンビネーションが妬ましいよりも、嫁女の名が「新田たか」とあるのに、ハテナと首を捻つて考へることがあつたらしい。

退役憲兵中佐

七十有餘歳にして濃艶な姥櫻を娶らうと、老いて益々旺んなる葉山端吾は退役陸軍憲兵中佐である。

彼の祖は代々古河藩の儒者で、先考雲外先生といへば日下部鳴鶴翁が一目置いたほどに江戸までも知られた書家で、屋敷が觀念寺の跡にあつたゝめ、その寺號を今以て通稱して

ゐるが、現在六十過ぎた士族の老人にして、その教へ子ならざるは足輕格の低き家柄の出であらう。

彼の資性極めて峻嚴、瑣事をも忽せにせざる典型的武人氣質の度に過ぎたのが祟つたのか、朝鮮勤務の中佐止りで第一線を退き、鄉里に歸つて恩給生活に入つたのであるが、乃木さんだつてこんなに野暮ではなかつたらうと思はれるほど、餘りに謹直な態度を以て市井の雜事をも律するので町民共は恐縮して敢てお近づきを乞はず、破格にも將軍並みに閣下の尊稱を奉つて敬遠するのだが、彼氏もまた內心却つてそれを悅び、己を獨り高うするので交友僅かに兩三名――大祭祝日の式場に颯爽たる軍服の晴れ姿で參列すると、

『そら、觀念寺の、おツかねえ人が來たぞ。』

『みんな――おとなしくすんべや。』

などゝ、姦しい小學兒童も默るくらゐ……從つて、居常謹嚴寡默なる彼の身邊に侍る細君たるまた辛い哉で、最初の賢夫人が忍苦の永い年月を辛抱强く仕へて、甚だ酬いらるゝところ少い生涯を終ると、土地家作持ちの家柄はよし、八方から後添ひの世話をする人がありさうなものだが、

『どうも閣下の家ぢやアね……』

『うん、いつも非常時だつてぢやねえか。――淨庵と梅干でも喰はして……』

『それで女中がゐつかねえんだとよ。』

『なにも、さう節約しなくともよかんべ。こちとらと違つてあるものがあるんだからナ。』

まるで臺所を覗いて來たやうな噂も立つし

『丁度、お恰好な後家が栃木にゐるんだが、下手な口の利き方をして、氣に入らなかつた日にや、仲人もろとも、並べて置いて四つにするなんて、サーベルで脅かされるかも知れねえや。』

『まつたくよ、觸らぬ閣下に祟りなしだ。實は俺も某會社重役の未亡人で、子無し、裁縫堪能、容美、貴夫人向き、嫁したしツてのを知つてるんだが……』

『オイ、そいつは今日の「朝日案内」の求縁廣告に出てゐやしなかつたか。』
『あはん！　何だつて、お前はあんな所を見てやがるんだ？』
『大きなお世話ぢやねえか。――都合によつたら、俺の嬶アと入れ替えにすべえと思つてよ。』
『手前の女房の前ぢや出來ねえ話だナ。』
『うん、内密々々、觸らぬ嬶アにや祟りなしと來やがらア……』
と世話好きな男も冗談半分に忘れるともなく、男やもめの閣下の身を案じてくれないので、萬事家計の切り盛をやらせてゐた一人娘を、遠く北海道の官吏に嫁がせてからは、勿體なや、位階勳等の立派な身分のくせに、三度三度の食事から肌につける白旗の淨めまで葉山憲兵中佐自身の手を煩はさゝるを得なくなつて終つた。
『いや、この方がタンカンで、うるさくないだけ自分の勝手ぢや。』
さうは仰しやるものゝ、矢張り心に若干の淋しさがあつたのであらう。閣下も「案内廣告」の熱心な愛讀者であつたらしく、われから進んで、東京の結婚媒介所へ良緣を求めようと、堂々たる官姓名の肩書いかめしく申込まれた。
但し、當年六十九歳の老の身に、いさゝか氣恥かしさのあつたものか、十幾つかのサバをよんで、所定の用紙へ記入されたのを嗤つてはお氣の毒だ。
いや、常に羽織袴の姿勢正しく、端然として利根川畔を逍遙なさる美しき髭の紳士に、六十歳以上と鑑定する人はないであらうほど、觀念寺閣下のすべてが若造りであるから、その邊のところは御本人任せでよいではないか。

野暮なやの字

ちとお歳を召してはゐるが、何よりも當世第一の資産、それに社會的地位も相當で、品格高尚と三拍子揃つた殿方が、嫁さがしに御光來遊ばしたのだから、媒介所ではネギ鴨以

上の有卦に入り、暫らくは男子部代表のマネキン筆頭に奉つたかも知れないが、兎に角、誠意を以てお世話申上げた結果、美奠が名代の老舗萩村主人の姉、仔細あつて出戻りの不運をかこつ四十女――そんなのにあり勝ちのヒス型でなく、いとも貞淑な良妻向きの婦人を古河の邸宅に迎へ、

『流石は廣い東京ぢや。こんな十人並の女が良縁もなく打ち棄てゝあるとは……いや、然し、かうやつて田舎住まひの我輩に直ぐ見付かるなぞは、廣いやうでも狹いのかナ。』

と頗る御意に召したが、東京から持參の荷物道具類をトラック二臺に積み、十六里の道をいそ〳〵と初婚みたいな仕度で乘込んだ彼女は、やがてのことに、廣いながらも淋しいわが家にぽつねんと、武骨一點張りの閣下のお相手ばかりしてゐるのが辛氣くさくなつたのであらう。

いかにも下町の商家育ちの好みらしい三味線を取出して、粹な清元の音締めに撥捌きの鮮かなところを示し、

『ほう、こりや珍らしい。――觀念寺にも春は來にけり……か。』

久しく陰に籠つてゐた同家の一陽來復を、近所界隈の町人共も祝福するのであつたが、折角の江戸趣味も閣下の耳には念佛ほどにも響かず、低級卑俗この上ないものゝ如く苦り切つた。

ところが彼女は、この音曲を生命に、先夫と別れてからの十數年、自分の藝の徒らに流れ去るのを傍の人ほど苦にもせず、專ら藝道精進に寡婦生活を送つて來たのだが、いつまで面倒みても際限がないと、弟夫婦が、邪魔扱ひをしはじめたので、われから進んで結婚媒介所を利用する氣になつて、田舎武士ながらも葉山端吾――相當なものと思つて來てみれば、矢張り川柳點に冷評の的となる淺黄裏の野暮天に過ぎないのが悲しかつた。

〳野暮たやの字の屋敷もの……

ある日のこと――いつもの通り軍服の廢却品を着込んで、庭の草むしりに餘念もない折柄、苟も亭主閣白を輕蔑するみたいな彼女の唄聲を、低くはあるがはッきり聽いて、そ

れが「夕立」の一節と知るよしもない閣下は、

『馬鹿！　貴様は本官を愚弄する氣か。』

つか〳〵と土足のまゝ座敷へ驅け上り、彼女にビンタを一つ喰はせる手も見せず、女の魂とも打込んで愛する三味線を足蹴にしたのが不緣の因であつたとか。

後になつて土地の人に聞けば、どうも閣下の癇癖高きこと尋常ならず、先夫人がどのくらゐ、それで苦勞したやらわからぬさうで、

『そんな痛い思ひをするよりも、いつそ、好きな道を清元の師匠になつた方が……』

藝が身を助けるほどに上達してゐるか否か、わが身の前途を考へるまでもなく、二臺のトラックは古河から東京へ、十六里の道を遠しともせず、持參の荷物萬端をキヤリバツクして終つた。

かくて觀念寺の邸宅を訪ねる客に、東都名代の萩村の羊羹が惠まれなくなつて、再び孤獨の自炊生活を續けること四年――茶を呑んでも味氣ないのに意を決した閣下は、もう一遍勇を皷して結婚媒介所を煩はす心になつた。

『なるべくならば氏素姓のよい女子を所望したい。敢て老若美醜を問はんが、商家育ちは面白くないやうぢや。』

『へえ、御尤も……旦那様――丁度お誂へ向き絶好の機會！　新田義貞の後裔で、しかも若くて美しい方がございます。』

『ナニ、南朝の忠臣？　それは耳よりな次第ぢや。よろしく計らつて呉れ。』

果して眞實ならば、葉山家にとつて不足のない配偶と乘氣になり、前回は格別急ぎもしなかつた入籍問題を、善は急げとばかり、新田たか女を引入れ匆々に、正式の届書を役場に提出したのであつた。

町の長老會議

茨城縣古河の名譽町長加藤庄翁邸の日曜日は、町の有志家の中でも長老株の二三が集つて、碁に謠曲に暮らすのを常とした。

そして、老人には、老人らしい漫談も出るのだが、役場へ例の婚姻届の出た次の長老會議に、葉山端吾の若やいだ情報が話題に上つたのは當然であらう。

『どうも、あれは容易ならぬ女のはずぢやが、大人は承知の上で貰つたのかね。』

老町長は役場でハテナと疑念を抱いて、そのまゝ未決書類の函に保留して置く理由を語る前に、念のため閣下と一番昵懇な、潰れた銀行の重役池長吉に訊ねた。

『そりや、もう……どうやら我輩も名を千載に謳はるゝ忠臣の直系を娶つたかと思ふと、男子の本懷これに過ぎん。冀くば、この老骨に一子を授け給へなんて、頗る悦に入つてますよ。』

『はゝゝ、あの元氣なら出來るかも知れん。』

これは官吏上りの恩給生活者小村陸平で、永らく病床にあつた細君と數年前に死別して以來、專ら養鶏を趣味として、その孵化率九十パーセントを自慢の老人だけに、拙者の鑑定なら狂ひはござらぬといひたげである。

『左樣――大殿樣が四號に和子をお生ませなさつたのが、七十二の時でしたかナ。』

『老子爵はお達者とは申せ、大分よぼ／＼の態でした。しかも、あのお妾にはやくざが一人ついてたさうで、眞實、どなたのお胤やらわかつたものでない。』

『そんな話ですナ。あの御老體より歳上のくせに、觀念寺はわれ／＼六十臺が顏色ないほど若いんだから驚く。』

『實は、こゝだけのお話ぢやが、俺は妙な關係であの女子の前身を知つとる。――』

と說き出したのは庄翁で、彼が東京に活躍の重役業時代、同じ會社の監査役の親戚に、當時の府下南葛飾に知られた大地主があつてそこの大旦那大泉喜作が矢張りソウトウな老人らしく、よせばよいのに家柄と美貌の兩天秤に參つて、彼女と均衡のとれない緣組みをしてヤニさがり、同棲一年經つか經たぬに、十分の未練を殘したまゝ、あの世へ旅立つて

終つた後は、お定まりの遺産をめぐる裁判沙汰が起つたといふ話の又聞きである。

そんな關係で庄翁の會社の顧問辯護士が大泉家の當主側に立つて、彼女を取卷く一味の相手になつたのだが、その間にいろ〳〵の交渉のあつた末、涙金としてはどうかと思はれる一萬圓で手を打つことに落着した。

――その席上、矢張り善は急げとでもいふのか、臆面もない彼等同士の骨折り賃について、一目で他人とは思へぬ自稱後見人と、三百を氣取る嫌味な男との間に激しい口論が起ると、あられもない留め女の新田たかが、

『何を生意氣おいひだい。お前さんには金錢に代へられないお禮が、もう先拂ひで相濟みぢやないか。』

と啖呵を切つたので、早いとこやつた奴の面喰つたのはさることながら、

『いや、怪しからん。あんたはこんな下郎にまでも……ふむ、それで御先祖に申譯がある と思ひますか。』

後見人氏は憤慨の餘り、彼女の襟首に摑みかゝらうとすると喧嘩の相手方たる三百氏が仲裁に入つたり、何が何だかわけがわからなくなつた辯護士、

『そんなやゝこしい話をこゝでして貰つては迷惑です。』

と退去命令を發したとか……

そんな經緯のある女だけに、今度の緣結びも葉山家の資產と端吾中佐の恩給目あてに、閣下百年の後の遺族扶助料をもせしめる大計を樹てゝ、一味徒黨が背後に控へてゐるのではあるまいか。

『まだほかにも妙な噂を聞かんでもないが、それは兎に角、間違ひのないうちに、池君からでも注意してやつたらと、俺は例の届書を握つとるんぢやが……』

『成程、小村さん――どうです。かういふことはあなたの方が適任ですよ。』

『いや、やもめ生活の俺からだと、妬いて水を差すやうで面白くない。』

餘りいゝ役でもないとみえて、三人寄つて一致するのは、

『どうも大變な女を引張り込んだものだ。』

と徒らに嘆息をつくばかりの小田原評定に日が暮れて、誰も貧乏籤を引きたがらないので、七十三歳の葉山端吾と孫娘みたいな新田たかとの婚姻屆は正式に受理されたのであつた。

妖魔の婚禮

彼女の振廻す系圖は實に堂々たるもので、僅か八萬石の小藩に仕へた儒者を誇る家の嫁には勿體ないくらゐだ。

――群馬縣多野郡萬場に原籍のある士族で、建武中興の名門新田義貞を祖先に戴き、明治の元勳三條實美公の甥に當る實父貞美の歿後、その賢夫人たりし感光院殿と申し侍る母と共に武州熊谷に起居し、同地の女學校に通つてゐる間に、早くも某大學生と割なき仲となり、半途退學して一女を分娩したのが、數奇なる半生の初まりでもあらうか。

その後幾何もなく、線香花火みたいな戀の大學生と別れて各方面を流れ歩き、美貌を種に身を持ち崩し、そのころの市外大井町に怪しげな事業會社の看板を揚げる自稱工學士福井久二郎と結婚したのは十三年前で間もなく、別れてから今に至るまで、不即不離の關係を保ちつゝ、何か事あれば後見人を名乘つて現はれる六十男こそは彼の世間態を憚る表向きの姿である。

かくて、葉山端吾とお目出度い緣組みをするまでに、彼女は南葛飾の大地主に試みたのと同樣の手段を弄して、何人の男と切れては結び、結んでは切れて、その都度、莫大もない涙金をせしめしことよ！

しかも、彼女の濃艶なる肉體に魅せられ、巧妙なる辯舌に丸められた御本尊樣にして、よくぞ男に生れけりと、わが老の身の幸運を悅に入らざるはなしといふのでも、大抵なところはお察し申上げられようではないか。

そんな次第で觀念寺邸にも春霞が靄鬱としてゐたのであらう。

――日ごろは短慮な芝居の殿様みたいに癇癖の强い閣下が、何年にもないほがらかな顏で晩酌に陶然として、お家の萬歳を壽ぎためにと、廣いお庭に丹頂の鶴でも飼ひたい心境らしい。

ところが、南朝の忠臣新田の嫡流たか女は矢張り窮屈がつて、姫育ちのあられもない注文を、内密でこつそり近所の魚屋へ持ち込んだ。

『御面倒でも炊きたての御飯で、お刺身を御馳走して下さいませんか。』

『まア、わざ〳〵恐れ入ります。お電話をお掛け下さいますれば、直ぐお届けしますのに……』

『いゝえ、あたし、御邪魔でも裏の方のお部屋を拜借して、こちらで頂いて參りたいんですの。』

『あはゝ、いやだよ、奥さん――』

野人禮に倣はぬ魚七の主婦は、忽ち馴〻しい言葉遣ひで冗談扱ひにしたが、觀念寺夫人は案外の大眞面目だ。

『ほんとに眞劍ですのよ。まことにお恥かしいお話なんですけど、當家の旦那様はトテモ喰べ物のやかましい方でして……』

それにしても、いさゝかへんだと思つたが折角の御依頼とあれば商賣冥利、御意のまゝに召上つて歸つて頂いたが、その次には同じ手を町でも一流の割烹店に用ひられ、養魚でないが自慢の鰻の蒲燒やら、炊きたての御飯にお刺身は勿論、御酒も少々はいけたらしい――しかも、そのお勘定には閣下からお小遣錢を一文も頂かぬ身の悲しさを、つく〴〵とお歎き遊ばされての末に、金紗の反物を取り出してお釣錢をといふ寸法……

『姐さん――これで何とかして下さいませんか。いゝえね、あたしは簞笥一杯、まだ手をつけない反物を持つて參りましたんですが、もう、お婆ちやんになりますと、こんな派手な柄のは着られませんわ。まつたく、歳はとりたくないものね。おほほほ。』

最初のほどは料理屋の女中も呆れたらうが何にしても値段でない捨賣りみたいだから、土地の呉服店で腕算用の掛買ひよりもずんと格安、それからそれへと若干の取引はあつたやうだ。

家内絶對安全

その古河で川魚のうまいもの屋の大和は、町長庄翁御贔屓の料亭でもあつたので、いつとはなしに、お料理と反物との物々交換が、さほどにはまだ遠くない彼の耳に入つた。

『ふむ、何年經つても、あの癖は止まらんとみえる。――觀念寺もいまに困るだらう』

彼が先の長老會議で、いふを憚つて遠慮したのは、新田たかと稱する女が果して義貞公の子孫であるか否かは別として、彼女が南葛飾の大地主の後妻になつてゐた頃、百貨店荒しの萬引常習犯みたいな噂を立てられたばかりでなく、一度ならず、その筋の御厄介を煩はしたこともあつたが、資産家の女房にもあり勝ちの病的發作として、示談事濟みといつた扱ひを受けてゐた一件である。

日曜の町長邸では、再び前と同じ顔觸れで長老會議が開かれた。

『魚の好きな美女が葉山家を狙ふなんて、まるで猫騒動みたいですナ。』

『はゝゝ、その反物が臭かつた日には大問題ぢや。池君――細君は現在でも東京へ行きますか。』

『さう仰しやられると、ちよい〳〵用達しにといつて不在のことがありますよ。』

『仕事に行くんぢやあるまいね。』

『さアその邊は何とも請合へませんが、今度の家内は大層見立てが上手だらうなんて、新調のセルを嬉しさうにひけらかしてゐたことがありました。』

『まさか。東京で失敬して來た品ぢやなからう。』

『觀念寺のためにも、さう思ひたくないですナ。』

『御尤も……ついては御兩君の中、でどなたか然るべく事を未然に防ぐ心算で、それとなく、大人の意向をさぐつて頂いたらと思ひますがね。こんな悪い噂は町の平和のためにも何とかして解消して貰はんと困る。』

それでは誰彼といふよりも、一緒に揃つて出掛けた方がよからうと、池、小村の兩人が葉山端吾と膝詰めの忠言に罷り出たところ、

『俺も永らく憲兵の職にあつた人間で、家内の擧動不審ぐらゐ他人の指圖を受けんでも、ちやんと遠慮なしに調べとる。ぢやが、安心して頂きたい。――』

正しく彼女が新田の正系たるは確實で、父母の歿後、青山に數千坪の土地と先祖傳來の家寶など、可成りの遺産を繼承したのに、亡き親の委託を受けて後見役になつた福井久二郎を信頼し過ぎて、映畫會社その他の事業に失敗した尻拭ひに滅茶々々にされたのが問題の發端で、男まさりのたか女は毫も假借なく、その不都合を責め拔くので、流石の彼も頭が上らず、兩者の間には債權債務の關係があるだけで、決して怪しい仲ではないさうな。

『その點は我輩得意の戰術を用ひて、糺問したんぢやから信用して貰ひたい。』

昨今の福井はどうやら商賣の茅が出たらしく、東京で流行の貸衣裳店を營んでゐるので自然と反物の仕入れなぞも格安なのに、こちらは萬事舊債の振替勘定で、現金を一文も出さず、選り好み自在なので新柄は望むに任せて、無償同樣に持つて歸れるんだとか。

『俺は世間で何といはうとも、家内を信頼しとる。町長も餘計な心配せんで、この見るも穢らはしい町政の淨化運動に努力して貰ひたいもんぢや。』

却つて庄翁へ鞭韃の辭を頼まれたみたいな態で、折角の勸告使も引下らざるを得なかつた。

老のランデヴウ

葉山夫人になり濟ませた彼女の上京はいよ〳〵激しく、初めの間は愼ましやかに月一

回であつたのが、一週一回となるはまだ恕すべし。――僅か一時間餘りの汽車で日歸り十分の土地にも拘らず、一泊二泊と七十有餘歳にしてなほ且つ若き心の老人を待ちわびさせるやうになれば閣下は友人に向つて女房禮讃絶對信任の意を表明したほどに虚心坦懐たる能はず、自分からのこ〳〵お迎へにお出掛け遊ばして、伴れ戻つてからの荒仕事は容易ならず、誰一人をらぬ古風な廣間に彼女を引き据ゑての責め折檻が愛すればこそ……なんださうで、この理窟は凡俗なる町人共一向に合點いかぬやうだ。

それでも彼女の上京癖は退ツびきならぬ用件を、名門新田家復興のために作つて止まずにゐたが、終に昭和七年の春三月、銀座のM百貨店で現場を押へられたのが運の盡き、何もかも表沙汰になつて、一切清算の時機が到來した。

――鞆井との腐れ縁、金持ち喧嘩せずの原則をよく呑込み、好んで老富豪に嫁しては死別又生別、次から次へと濡れた涙金の渡り鳥商賣、道によつて賢き合法的手段で捲上げた金が、現在品川區大井町の鞆井邸宅建築資金になつた等、等……どうやら萬引問題は憲兵中佐夫人の肩書に免じてお上の慈悲を願ひ將來を堅く戒められて納まつたが、さきに立派な口を利いてゐるだけに、葉山端告の面目は丸潰れとなり、飽きも飽かれも（？）せぬ仲を離縁の止むなきに至つたのである。

かくて、茨城縣古河町の長老達に氣をもませた妖女は東京に引揚げたので、永遠に閣下との縁が切れたと思ひきや、又ぞろ、妙な噂に惱まされた。

――觀念寺が東武電車で日ごろ用もない幸手粕壁なんて土地へ行くのは、彼女と雙方出張りの媒曳であるとか、どこからともなく深夜に自動車を驅つて、彼女を邸宅に伴れ込んだ二つの影を見たものがあるとか、いつの世にもさがない下郎の口に戸はたてられぬ。

『まさかとは思ふが、あなたの名譽のためにも、遠出の散歩は慎まれた方がよくはないかと考へて、實は、それとなく伺つた次第なんです。』

例の潰れた銀行氏が嫌な役目の據所なく、葉山邸を訪ねての、それとなき諫言である。

『うん、御厚意は有難い。ぢやがね、池君――その罪を憎んでその人を憎まずと古語にも

ある通り、あれは運命の波に漂ふ憐れむべき女子だ、我輩は町人根性の世評を超越して所謂建武中興の忠臣義貞公の嫡流存續のため、彼女の精神的後見役に甘んずる決心をしとる。それが武人としての盡すべき責務であり、行ふべき道とも心得てをるんぢや。』

凛然といひ放つた聲は四隣を壓し、別の座敷に姿を潜めて滞在三日のたか女も、さぞや感涙にむせびつゝ掌を合せてゐるだらうと思へば、閣下の胸中滿更でもあるまい。

奥の手常用

退役憲兵中佐葉山端吾が南朝の忠臣新田義貞の直系たか女の精神的後見役を勤むること約一年――これを俗世間の野暮な比率で再檢討に及べば、七十六對三十九テナお歳加減になるのだが、非常時の折柄　狹い田舍町でもそれを敢て問題とせぬやうになつた今年の三月　大東京の品川區に編入せられた大井の伊藤町にある福井貸衣裳店は新柄豊富の高價な衣服をワンサと取揃へてゐるのでその方面の利用者に頗る評判よしと聞込んだ所轄署の某刑事が新聞廣告屋の外交員に化けて行くと店頭で最新流行の反物類を整理してゐる女にどこか見覚えがあると思ふも道理……常に孔雀のやうに着飾つて、時には洋裝の派手姿になることもあるが、京濱國道を自動車で走らせる貴婦人ではないか。

『なアんだ。自分の店の貸衣裳を着て歩いてやがつたのか。』

そんな考へ方は素人であらう。――第六感の鋭敏な名探偵なら、金のあり餘る高利貸ほど吝なものであると同じく、着物に損料を稼がせる貸衣裳屋ほど自分では質素な衣類を纏ふべきに、この女は……ハテナ　てんで、本署に御足勞を願ふべきである。

ところが、彼女は――咄！　この不淨役人下りをらうぞといはんばかりに柳眉を逆立て『まア、隨分失禮ですこと。――妾こそは勿體なくも……』

威だけ高になつて、そも〳〵から辯舌爽かに捲くしたてたが、年貢の納め期が來ると、却つて曳かれもの〻小唄みたいで可笑しく、遠慮のない家宅捜索をやられては一も二もあ

つたものぢやない。

――悉く、これ萬引オンバレの贓品が特殊裝置の天井裏から現はれ出るし、その商標を辿つて反物の絲をほどせば、六大百貨店の被害高が昭和六年の十一月ごろからでも通計二百五十餘件、總額數千圓に上つてゐる。

そこで、更に古く彼女十四歳にして行つた處女萬引までも遡ると、武州熊谷の女學校一年生仲間が、土地の文房具店で花模樣の封筒やレターペーパーを、あれやこれやと品定めの後、引上げて自宅へ歸つてから驚いたのは彼女、

『あら、どうしてこんなものが……』

われながら不審に堪へぬ面色で、懷に潜む小さな手帳一冊……金箔にして精々十錢足らず、しかも、別にもう一冊、正式に支拂ひを濟ませて買つて來たのに、まつたく餘分なものがあつたので、お返しに推參するのが理の當然とわかつても、乙女ごゝろの恥かしさには、それもなりかねたのであらう。――そのまゝ頂いて終つた。

『あんなに大勢の人中で、誰も氣がつかたなんて嘘みたいだわ。』

これが萬引常習犯になる最初の動機ださうで、三年生のころには修學旅行に際して、箱根名產寄木細工の相當に大きい針箱をせしめ損なつて、附添ひの先生を土產屋の主人の前に冷汗三斗の想ひをさせたこともあつたが、

『何事も名門の出に免じて、お許し遊ばしますやうに……』

學校に歸つて來てから問題になつた時、彼女の賢母がそんな工合に事件を丸めたので、つくゞくと自分の家柄を有難く感謝したらしく、

『萬事、この手に限るわ。』

とばかり何十回となく同じ臺詞を繰返しては、世間を甘く渡つたのである。

手當り次第

その萬引も月一回の發作なら、女の身として無理でないなんて、兎や角と知つたか振りの生理的に、默認するみたいな同情を寄せられる、思ひやりの有難、御時勢ではあるが機に臨み品に觸れては月何回でも、よろしく早いとこやる新田たかのやうになると、さう簡單には片付けられまい。――實に手當り次第である。

女學校四年の秋、大學生と戀に陷ちた不身持ちの熊谷を後に、姙娠何ヶ月かの彼女が彼氏と東京も下谷の小さな家に佗住ひのころ、錢湯に行く度毎に、一個あれば澤山な石鹸函の數が增す……

『たかちやん――これ、どうしたんだい？』

『あら、あたし、持つてかなかつたのね。』

『どうも君は粗忽かしいよ。――返して來給へ。』

『……でも氣まりが恥かしいわ。誰のだかわからないんですもの。』

『それもさうだけど……』

『いゝぢやないの、腐るもんぢやなし――』

その間はよかつたが、ある朝、隣裏に住む蒿頭の若い者に敗鳴り込まれて、大學生は赧くなつたり蒼くなつたりした。

『奥さん……お宅の高箒、間違つてやしませんか。』

『さア……そんなことないでせう。』

『えへゝ、どうも自宅のとよく似てるんですがね。』

『隣分失禮ね、どうせ、あそこの荒物屋から買つたんでせう、同じぢやありませんか。』

『馬鹿にするねえ、若夫婦だと思つて遠慮してりや、いゝ氣になりやがつて……證據まで見せなきや、手前の恥がわからねえのか。』

竹の箒を逆さに立てゝ、トンと地面に突けば柄が拔けて、墨の印も鮮やかな屋號が現れるではないか。

『これ、この通り……文句なしに恐れ入つたか。どうも、このごろちよい〳〵小物が失く

なりやがるんでそのたんびに俺らが小言を喰はされてたんだ。いゝ面の皮よ。――外面女菩薩、内心如夜叉……お釈迦さまでも御存じあるめえ。』

兄イはすつかり溜飲を下げたが、彼女は案外恒然として角帽の主人を慰めた。

『ちよいと默つて拜借したゞけよ。心配する必要ないわ。あら、怒つてんの？』

『これが平氣でゐられますかッてんだ、どつかへ引越さうぢやないか。』

『ほゝゝ、あんた、割に意氣地なしね。――人の噂も七十五日よ。』

『その間にまた何を仕出來すかわかつたもんぢやない。』

『大丈夫……、もう御心配かけないわ。』

『どうだか……僕、今まで默つてたんだけど君といふ人は實際末怖ろしいよ。』

『どうせ、さうでせうよ。』

『いや、冗談ぢやない。僕は八百屋の御用聞きが荷車を引張つて來ると、いつでもひやひやする。』

『あら、どうして？』

『これ以上いひたくない。』

『まア！　どこで覗いてたの？　いやな人ねえ。――胡瓜の一本やお茄子の二つ三つ、景品みたいなもんだわよ。』

『その心理狀態が僕にはわからないんだ。ほんとに君の祖先が義貞公なら、人のためには自分の大切な太刀でさへも稻村ケ崎から海へ投げたぢやないか。』

『さう〳〵そんなお話を歷史で教つたわね。』

『僕も首尾よく卒業して文學士になつたら、どこかの先生になる心算なんだけど、苟も教育家の細君たるものが……あれぢや困るよ。』

『ほんとね、以後氣をつけますわ。』

と愼ましやかな女の心になるのだが、どこでどうやるのか、小遣帳に記けてない半襟があつたり、彼氏の知らない指輪が鏡臺の抽斗に匿してあつたり……やがて二人の仲に隔た

りが出來たのも、男の浮氣性ばかりを責められないやうである。

萬引狂奏曲

戀する良人を失つてまでも止められぬ萬引は、いよ／＼彼女の日常に缺くべからざるものゝ一つとなつたらしく、美貌を種の結婚妖魔として金持ちの爺さんを蕩し込み、身邊に不自由のない境遇となつても、しとやかな奥樣然とした服裝をして、百貨店巡禮の店内散歩をなさるのがお好きで、御意に召した品があれば、忽ち、お取り上げになる癖癖の募る一方であつた。

――それが眼を皿のやうにして見張つてゐる監視員に、どのぐらゐの數で發見されるものか、親しく伺つてみないからわかりかねるが、場馴れのせぬ新店乃至は改築後の新らしい賣場などで用ひると、とかくの失敗があり勝ちだとか。

彼女が新宿のH屋でやり損つたのも、地の理のよく呑み込めぬ開業早々の際であつたらう。それは幸ひにして示談濟みとなつたが、一どこの百貨店でも備へ付けてある萬引芳名錄に住所を書いた上に署名せざるを得なかつた。

――そのアドレスを逆用した同店の宿直見廻りの夜番が娘といはず、未亡人と申さず良家の夫人などにまでも手紙を出して、彼女等の一番痛い例の件をにほはせつゝ、ちと御面談致したきことありと、指定通りの場所へ誘き寄せ、色と慾を兩手に握つて悅に入つた實話は、すでに讀者諸君御承知のことゝ割愛するが、われ等の新田たか女も無論その中の一員であつたらしい。

然し流石は彼女である。ほんの出來心で一遍やつて直ぐ捉まつた素人衆みたいに、何もかも御無理御尤もと夜番氏の横暴を許さず、

『その代りに陣列の模樣變へになる時は、前以て知らせてくれなけりや嫌よ。』

『へえ、そりや、もう奥さんのためなら……』

『ほゝゝ、可愛い夜番さん！』

なんて自家藥籠中のものにして、常に萬引策戰怠りなかつたとか。

かうして前後二十數年間に、人知れずモノした品を金額に換算して、どのくらゐに達するか。

――塵でさへ積れば山となるんだから決して馬鹿な數字ではないはずであるが、

『そんなことを一々日記につけとく馬鹿がありますか。』

と、啖呵を切らんばかりの風情で、平然と嘯いて、取調べの刑事達に、逆捻を喰れたさうな。

『また娑婆に出たら、大にやる心算だらう。』

『いゝえ、もう二度と再び心得違ひは致しません。』

『どうだか……去年もそんな誓言をしたさうぢやないか。』

『はア、自分ではさういふ氣でをりますんですが、百貨店へ參りますと、いつも心持がへンになります。』

『それぢや、行かなければいゝぢやないか。』

『さうは參りません。』

『何故？』

『……だつて、百貨店は現代資本主義經濟社會におけるモダン女性の心臟なんですもの……』

まさか、そんなことはいふまいが、彼女の目出度く天日を仰ぐ時に再會して久し振りで出戻りの身を大地神明に誓ひ、今後は絶對に……とゲンマンの百萬遍を試みたところで、果して南朝の忠臣義貞公の嫡孫に、清く輝ける後半生が期待されるか否か、甚だ心許ないことではないであらうか――といふと、大變非禮極まりなき豫斷を下すやうだが、この名門の出を誇る女は、たゞ單に物慾一點張りの萬引常習犯と異なり、ちと變態的なところがないでもないのである。

彼女が出資社員になつてゐる合資會社福井貸衣裳店の附近の人々は、時折の夜更に、殆ど調子みたいなピアノの音を聽かされて、

『誰が彈いてるんだらう。』

『さア、あんなものをやるお嬢さんはゐねえし……うん殊によると、あの奥さんかナ。』

『下手な役人の謠曲も耳ざはりだが、あゝいふ金屬性の音も餘りいゝものぢやないね。』

『また町内に近所迷惑なお道樂が一つ增えやがつたぞ。』

といつた工合に厄介がられてゐたが、實は矢張り彼女の仕業であつた。

――そこは人目を避けた奥座敷で、部屋一杯に彼女の戰利品とでも稱すべき、五彩の色とり〴〵の綺麗な反物やら、寶石入りの指輪に時計その他、各百貨店が競爭して出品する小型博覽會の陣列室みたいに、飾り並べた一隅にピアノを据ゑて、彼女獨特の指頭に當り放題の出鱈目な鍵の叩き方で、恰も勝利に醉ふた强者の凱歌を奏するが如く、眼を八方に廻轉させて「歡喜の萬引」を、いつまでも忘れまいと努めつゝ彈じ狂ふのであつたとか。

ナニ、その相當に大きなピアノを、萬引新田の姫君がどうやつて、勝手にお持ち歸り遊ばしたかと仰しやるんですか？　さア、どうも、そこまでは……（をはり）

萬引一代女（了）

昭和十年十一月七日　印刷
昭和十年十一月十一日　發行

萬引一代女
定價十錢

著者　辰野九紫

發行兼印刷者　三井八智郎
東京市芝區櫻川町六番地

印刷所　文光社印刷所
東京市神田區須田町二ノ三

（版權所有）

發行所　東京市芝區櫻川町六番地
第百書房
振替東京九〇七七番

355
959

終